1950年代半ばのソ連建築における ニキータ・フルシチョフの言説を巡って

Nikita Khurushchev's Discourses on the Soviet Architecture in the Mid-1950s.

鈴 木 佑 也*

要旨

本稿は、1930年代の全体主義体制下のソ連において建設途中で頓挫した建築プロジェクト《ソヴィエト宮殿》が1950年代において再び着手されるまでの経緯として、当時の政府指導者ニキータ・フルシチョフの建築に対する言説を考察するものである。政府指導者となった彼は、それ以前の体制を非難したいわゆる「スターリン批判」でこの建築プロジェクトについて言及している。これは、政府最高指導者となった彼が建築そのものに対して容喙することを示唆しているのである。本稿では、まずそうした彼の建築への容喙あるいは彼主導の建築政策をその出発点となる「設計および建設における過剰装飾の排除に関する」ソ連共産党およびソ連閣僚会議決議に至る経緯を明らかにする。その後、その排除対象となり得た建築作品の分析と考察、そして全体主義体制、つまりスターリン時代における権力者の言説との比較を通じて彼の言説が持ち得た意味に関して考察を図る。

キーワード：政治と建築、スターリン批判、権力者の言説、フルシチョフ時代の建築、
装飾性と規格化設計

1．序論

1956年のソ連共産党第20回大会においてソ連共産党第一書記ニキータ・フルシチョフは、秘密報告という形で1953年に死去したヨシフ・スターリンを中心とした政府首脳部による政策及び政治運営を批難した［いわゆる「スターリン批判」］。この秘密報告の中で挙げられている批難対象のうち、未完に終わった一大国家建築プロジェクト《ソヴィエト宮殿》が含まれている。彼はこの建築プロジェクト自体を批難するのではなく、あくまでそれを組織した政府首脳部を率いたとされるスターリンを批難対象としている。一方でこの建築プロジェクトを「ヴラジーミル・イリイチ［・レーニン］の記念碑」として、建国者を讃えるモニュメントであることにも彼は言及している。この言及が基となり、のちに《ソヴィエト宮殿》の競技設計が新たな形で再び行われるのである。この「スターリン批判」以前よりフルシチョフは政府首脳部の一人として建築政策に積極的に関与し、指導者となった後も建築に関して容喙し続けた。スターリンによって「建設に関する問題はずっと後回しにされ、そして忘れ去られてしまった」[1]《ソヴィエト宮殿》建設の再着手は、フルシチョフにとって関心事の一つであったことは想像に難くない。そうであるな

* Yuya SUZUKI［国際学部 国際文化学科 准教授］

[1] Российский Государственный Архив Новейших Историй (РГАНИ), ф. 1, оп. 2, д. 17, л. 74.

らば、新たに競技設計を組織し建設着工を目指した《ソヴィエト宮殿》に求められたものは何か。批難対象であるスターリン時代に求められていたものと異なるものであることは、おおよそ理解できる。第二次世界大戦以前より住宅問題に関して持論を展開してきたフルシチョフは、1954年12月7日に開催された建設労働者全連邦会議において建築における装飾性を批難し、翌年の「設計および建設における過剰装飾の排除に関する」ソ連共産党およびソ連閣僚会議決議を採択させることとなった。このことから「建築における装飾性」と「設計および建設における過剰装飾」の否定、またはそれらの排除が《ソヴィエト宮殿》に求められていたと推測できる。ここからフルシチョフが新たに組織する《ソヴィエト宮殿》の前段階として本論文では、この二つの要素が形成される過程、そしてフルシチョフの建築に関する言説とそれらの結びつきをソ連建築界での潮流と権力者の介入という二つの観点から解析し、考察を以下のように図る。

第一にフルシチョフが否定しようとした「建築における装飾性」と「設計および建設における無駄」が、どのような建築要素と結びついているのかという点を1930年代後半から1950年代前期におけるソ連建築界での議論から明らかにする。この二つはスターリン時代にソ連建築界で確立されたものとされているため、その建築的要素を明らかにしたのち、第二にそれまでの大型建築プロジェクトでどのように応用されていたのかを検証する。その中でも第二次世界大戦後にソ連の首都モスクワのランドマークとなるべく建設された高層建築群のいくつかを取り上げ、その建築的要素の具体例を提示する。そうしたものがソ連建築界のみならず、フルシチョフの発言によっても否定され、彼のイニシアチヴの下で政治的変動に組み込まれていたとすれば、建築分野におけるある種のパラダイム・シフトが生じたはずである。そのため、第三にこうしたパラダイム・シフトを当時の政府指導者であったフルシチョフの建築分野での発言から分析する。その際に、文化人類学者アレクセイ・ユルチャクによる1960年代以降のソ連社会における権力者の定義を援用しつつ、フルシチョフの公の場での建築に関する発言が何を表していたのかを明らかにする。これによって、フルシチョフが公の場で改めて着手することを宣言した競技設計および建築プロジェクト《ソヴィエト宮殿》の背景が明らかになる。

1930年代に一大国家建築プロジェクトとして組織された《ソヴィエト宮殿》は実際のところ権力者であるスターリンはほとんど口を挟むことがなかった。だが、それとは異なりフルシチョフ時代の《ソヴィエト宮殿》は政府指導者のイニシアチヴによって組織されるということを、本論文で敷衍することになるであろう。

2．1940-1050年代のソ連建築界における建築概念の変遷

「建国者を讃えるモニュメント」としての《ソヴィエト宮殿》がスターリンの個人崇拝と結びつき、「レーニンの教え」が歪められたとフルシチョフは1956年の第20回ソ連共産党大会で発言することになる。この「歪み」の矯正が《ソヴィエト宮殿》の再始動へと促すきっかけとなっていくのだが、この「歪み」とはソ連建築史家ヴラジーミル・ゴルロフが指摘するように「スターリン時代に特徴的な装飾が豊富な建築」によって生み出された「美学的フォルマリズム」であった[2]。第20回党大会でのフルシチョフ発言では、飽くまでスターリンを中心とした政治体制を批難しているため、建築に関連した「美学的フォルマリズム」の具体的な内容は見えてこない。フ

[2] *Горлов В.Н.* Речь Н.С. Хрущева на Всесоюзном совещании строителей в декабре 1954 г. как один из первых шагов в направлении десталинизации советского общества // Вестник МГОУ. 2018. № 2. С. 128

ルシチョフの非難するフォルマリズムがどういった要素から形成されているのか。この点を探るには、党大会での発言以前に議決された1955年11月4日付の「設計及び建設における建築的過剰装飾の排除」に関するソ連共産党中央委員会及びソ連閣僚会議決議案［以下「1955年決議案」とする］を精査する必要がある。

この決議の出だしは、建設手法の産業化と規格化設計[3]によって建設事業の改善が行われていることが述べられている。建設事業でこうした方針が取られたのは、「建築家の作品及び建築組織の設計において、多くの過剰さに溢れた建築の見てくれだけでうわべの側面が流布し、このことが党及び政府の建設建築事業における方針と合致しなかった」[4]からである。この「建築の見てくれだけでうわべの側面」とは、「それ相当な理由が全くない塔状の増築部分、装飾が施された多数のコロネード［列柱］やポルチコ［柱廊玄関］、そのほか建築の過剰装飾で、それらは過去から借用してきたもの」[5]を指している。こうしたことがかつての住宅や公共建築物建設で主流となっており、その結果住宅建設に費用が嵩んでいたことが指摘されている。そうした「過剰装飾を生み出す主な理由の一つ」として、規格化されていない個々の設計が挙げられている。この決議で述べられている政府主導でソ連建築において打ち出された方針［建設手法の産業化と規格化設計］は、過去から借用した過剰装飾とそうしたものを生み出す個々の設計といったそれまで取られていた方針から転換したものであることがわかる。しかし、この新たな方針は、この決議が可決された1955年の時点で「ひどく不充分なかたちで遵行されている」。特に規格化設計が定着しない点を問題としており、1954年の時点でモスクワでは建設中の建築物のおよそ18%、レニングラードでは建設中の353の建物のうち14棟のみが規格化設計で、他の都市で建設中の建築物のほとんどが個々の設計によるものであると報告されている[6]。この原因として挙げられているのは、この規格化設計自体が統一されたものではなく、各建設／建築機関で足並みが揃わず指導され、適用されているということだ。こうした不揃いな規格化設計に対する注意喚起は、設計を適用する機関だけでなく、規格化設計を発案する建築家や設計士にもなされている。その中で彼らが設計及び建設の際に念頭に入れるべきは、「建設の経済における諸々の問題、住民に対する最大限の快適さを生み出すこと、住居や学校、病院、その他施設のインフラ、同様に住居地区や街区の緑化」[7]が挙げられている。この点は1930年代半ば以降の都市計画で強調されたことを繰り返しているに過ぎない。しかし、これに続く文言においてそれまでの時代とは異なる点が強調されている。建築家や設計士たちは「過剰装飾やできの悪い作品を避けるために、設計及び建設における新しく進歩的なものすべてを普及させる者となる」べく、「生産の産業的手法を基とした国内外の建設における優れた成果を考慮して作成された最も経済的な規格化設計に応じて、建設がなされるべき」[8]としている。この目標を達成すべく建築そのものに対して求められるのは、「フォルムの簡潔さと厳密さ、そして建設手法の経済性」であり、こうしたことは「わざとらし

[3] この建設手法の産業化と規格化設計は1930年代後半からソ連建築界において調査及び研究がなされ、第二次世界大戦後から本格的に導入に向け試行錯誤が繰り返されていた。詳細は鈴木佑也「ソ連建築界における新たな段階：第5回世界建築か連合（UIA）国際会議モスクワ開催に関する考察」『スラヴ文化研究』Vol.18（2018）、22-43頁に詳しい。

[4] Коммунистическая партия Советского Союза в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК (1898-1986). 9-е изд. Т. 8. 1946-1955. М., 1985. С. 532-533.

[5] Там же, С. 533.

[6] Там же, С. 533-534.

[7] Там же, С. 534.

[8] Там же.

い高価な装飾ではなく、建築的フォルムの有機的な結びつきやその優れたプロポーション、材料や構造、細部、高品質な仕上げを正しく用いること」[9] によってなされるべきとしている。ここで重要なのは、建設費用増大の原因となる「過剰装飾やできの悪い作品」を排除することに主眼がおかれているのではなく、建設費用増大や建設テンポの遅れは徹底した規格化設計がソ連建築全般において未整備であるからと認識されている点である。この認識によってソ連共産党中央委員会及びソ連閣僚会議は「設計及び建設における建築的過剰装飾の排除」に至るのだが、その根幹を成すのは次の 4 点である:1.「建設において広範に渡り規格化設計を導入し、建築におけるフォルマリズムの発生及び設計と建設における過剰装飾と仮借ない日々の戦いを繰り広げること」、2.「設計や建築の仕上げ、計画、構造手法において過剰さの徹底した排除を目的とした現在建設されている建築物の設計書及び予算書の見直し」、3.「規格化設計を確立した計画を無条件に果たすことを約束し、このことにおける立ち遅れがなくなるようなやり方を適用すること」［実践面］、4.「規格化設計の強化、規格化設計を住宅公共建設事業への大幅な適用、設計と構造手法統一の保障、さらに規格化設計の改良が必須であると認識することを目的として、住宅及び公共建築物の規格化設計策定に関する国立中央研究所を組織すること」[10]。これらを大まかに分類すれば 1 は意匠について、2 は費用［あるいは経済性］について、3 は実施方法について、そして 4 は組織・運営について指摘していることが分かるであろう。このように 1955 年決議案の全文を追っていくと、建築における過剰装飾の排除はそれ以前に確立された「過去からの借用」によるスタイルが根強く残っているからではなく、党が推奨する規格化設計という新たな設計手法の導入が未定着であることから打ち出されたものであることがわかる。ゴルロフが指摘する「美学的フォルマリズム」が意味する具体的な対象とは「過去からの借用」によって生み出された過剰装飾や「出来の悪い作品」であると理解できよう。では、そうした過剰装飾が当時のソ連建築界ではどのように扱われていたのであろうか。この決議以前のいくつかの建築競技設計およびソ連建築界での議論を遡って、過剰装飾という言葉に与えられた当時の意味を追究してみよう。

「過剰装飾」が規格化設計の妨げであり、建設費用増大の原因で、かつ設計士や建築家に責任の一端があるという論調は、第二次世界大戦後の 1947 年において既に指摘され始めている。建築家カロ・アラビャンが『ソ連の建築』誌に寄稿した「国民経済発展復興事業の五カ年計画における建築の創造的課題」では、第二次世界大戦後の建設復興事業の中でも迅速な住宅建設実現とそれに伴うソ連建築界での意識改革を促すことが主旨となっている。前者は第四次五カ年計画（1946-1950 年）の法案で推奨されている「建設作業の自動化」と「建設現場でのプレハブによる組立工法」の導入、さらに「工場でのプレハブ建物、建設構造および部材の大量生産」を基にしている [11]。後者に関しては、そのような政府指針とそれに伴う「新たな環境」に建築家たちは対応する必要があるとしている。この点に関して、建築家たちはそうした新たな指針を自らの建築活動に反映させることなく「かつての過ち」を繰り返し、「レンガの無駄使い」や「セメントの無駄使い」が生じている現状をアラビャンは戒めている [12]。また、設計では「過度に多くある装飾的要素」や「建築フォルムの誇張」が見られ、それらは視覚的なアプローチによる「建築によ

[9] Там же.
[10] Там же, С. 535.
[11] Закон о пятилетнем плане восстановления и развития народного хозяйства СССР на 1946-1950 гг. М., 1946. С. 9.
[12] *Алабян К.* Творческие задачи архитектуры в пятилетнем плане восстановления в развитии народного хозяйства // Архитектура СССР. 1947. № 16. С. 3.

る建築装飾」として、「技術的かつ構造的な論理を大きく破壊している」としている[13]。設計や建設作業といった実際の建築活動では経済という要素が意識されなければならないとして、第四次五カ年計画の中で「資材の最大限の倹約」が建築において求められていることを援用する。しかし、現状ではそういったことが、「建築家の創作的関心」とぶつかるため建築家に全く検討されていないと批難し、「建築的フォルマリズムといった仮定、生気のない教条主義などではなく、実際の建設作業に対する関心と基準」によって建築活動が導かれるべきとする[14]。ここで挙げられている「建築的フォルマリズム」とは、当時の建築活動で見られると彼が指摘する建築材料の無駄遣いや過剰装飾、建築フォルムの誇張などであることがわかる。こうした点はソ連の「建築家の創作的関心」から少なからずとも生じており、その創作的関心の源泉をアラビャンはこの論文より前の『ソ連の建築』誌に寄稿した論文「文学と芸術に関する全連邦共産党中央委員会決定に照らした建築実践」で指摘している。

この論文の趣旨は、党政府の芸術方針に従ってソ連の建築界で実践されてきた「文化遺産の習得」が形骸化していることに警鐘を鳴らすというものである。この「文化遺産の習得」とは、本来は「建築のイデオロギー的内容を骨抜きにし、建築における創作のあらゆる問題を構成と建築材料の形式主義的戯れにする過度な単純化や機能主義、構成主義との闘い」のなかで理論武装として用いられたものであり、それによってイデオロギーの面で建築を強化するものであった[15]。しかしアラビャンによれば、そうしたことは「時折、過去の歴史的様式を審美的に堪能することや、古い建築的フォルムあるいは表面的で折衷的な加工品を盲従的にコピーすることに代わっている」[16]。これによって設計において建築物のファサードや外観に「建築家の創作的関心」が集中し、建築の創造性を著しく歪めていると彼は喝破する。また第二次世界大戦の勝利を讃えるようなモニュメント建築物においても、「ソ連国民とは合わない過去の服装で派手に着飾らせる」傾向を目にし、それらは「現代のソ連人とはなんら共通性を持たない無感動な劇場用小道具に見える」としている[17]。ここで注意しなければならないのは、ソ連建築界で推奨されていた「文化遺産の習得」が時代にそぐわなくなっているというのではなく、建築家が時代に合わせた形で「文化遺産の習得」を実践で反映していない点を著者が批難しているということだ。そのため「建築的フォルマリズム」が形成されたのは、時流に対応した表現形式を「文化遺産の習得」を通じて建築家たちが提示できていないことに原因があると言っても過言ではない。

こうしたアラビャンの論文が掲載された2年後、建築史家ミハイル・ツァペンコによって同誌に寄稿された「社会主義リアリズム—ソ連建築の手法」では、この点を克服するかのように規格化設計が取り入れられていることを伝えている。ここでは規格化設計が戦後復興事業における都市再建において有用であり、「[過去の建築：著者註] 遺産を批判的に習得し、建築の民族的フォルムを新たに展開する」[18]こと、つまりソ連建築のイデオロギーにとって重要な意義を持つことが唱えられている。この論文が寄稿された時点での規格化設計は、「もっとも熟練した設計組織

[13] Там же, С. 5-6.
[14] Там же, С. 6.
[15] *К. Алабян* Архитектурная практика в свете решений ЦК ВКП (б) о литературе и искусстве // Архитектура СССР. 1947. № 14. С. 1.
[16] Там же.
[17] Там же, С. 4.
[18] *Цапенко М.* Социалистический реализм – метод советского зодчества // Архитектура СССР. 1949. № 11. С. 9.

によって、より良い建築物のタイプを絶え間なく選定し、作り上げる」ものであり、より良い建築家が加わり、設計組織や建築関連の学術機関の援助が必要なものとされている[19]。ここから、規格化設計は建築家一人が創造性を発揮して設計作業を行うといったものではなく、建築または建設関連機関と連携して行う集団的作業として位置付けられていることがわかる。このことは、翻って一個人の「建築家の創作的関心」に期待を寄せず、関連機関との相互点検によって「建築的フォルマリズム」を生じさせない作業であるとも言える。しかし、そうした相互点検による「建築的フォルマリズム」排除を試みても、過剰装飾は散見されたようだ。

1950年の『モスクワの建設』誌に掲載された「大量生産型住宅の減額方法」では、大量生産型住宅の実現に向けた規格化設計と建築部材の工場生産の整備について言及がなされ、その効果として過剰装飾の排除が挙げられている。この効果をあげるには、建設コストを減額することであり、工場で生産される建築部材を最大限に統一することが挙げられている。こうした解決策が提示された理由は、「過剰装飾はしばし建築家自身が仕出かす」ものであり、彼らによって「献身的に設計案を改変することがあるため」、「建設費用の高騰を招き、住居の質が改悪され」、「建物において全く不要かつ使われない増築部分が登場する」ためとしている[20]。それまでの論文と同様に、ここでも「建築家の創作的関心」が仇となり、過剰装飾が生じているという論調が展開されている。そのため意匠に関する要素を工場で画一的なものとして生産することで「質の改善と部材価格の減額が可能」となり、最終的には、工場での建築物の基本部材を大量生産する上で「建築部材や製品のカタログが構成されなければならない」と結論付けている[21]。こうした「建築的フォルマリズム」といった過ちを犯す建築家の創意に頼らずに、規格化した設計作業を行おうとする風潮が広まっていく。

しかし、設計を経て、建設工事が行われ、その後完成した建築物が結果として高価格となった場合、その過失は建築物の立案段階、つまり設計段階に求められることとなるようだ。1953年7月号の『モスクワの建設』誌に掲載された論文「設計における過剰装飾に抗して」では、「建設費用減額に大きな責任を負っているのは設計者である建築家とエンジニアである」ことが述べられている。彼らは「向けるべき注意を建設の経済性に対して向けることはあまりなく、設計においてあからさまな過剰さを犯し」、「結果として建設価格の高騰となっている」[22]。既にこの時点で設計は建築家一人が行うものではなく、他の研究機関や組織と共同して調整する形が整っているはずなのだが、1947年のアラビャンと同じような批難が展開されている。これほどまでに設計を担当する建築家が批難されるのは、彼らが相も変わらず過ちを犯しているからではない。この論文が掲載された時点で「多くの点において過去の建築規範は廃れた」にもかかわらず、建築家たちはその建築規範を遵守しているからである。本来であればその建築規範を刷新し、すでに述べてきたような規格化設計および大量生産型生産方式に適合する設計手法が打ち出されるはずであった。だが、意匠に関する建築規範つまり建築のイデオロギーが刷新されることはなかった。以前の建築規範が設計の際に頑なに適応され、そのことが時代の要請に合わせた実践手法に対応できなくなっていたのである。そうした建築のイデオロギーは、ソ連建築史家ミハイル・メエロ

---

[19] Там же.

[20] *Богомолов В.* Пути снижения стоимости массового жилищного строительства // Строительство Москвы, 1950. № 12. С. 4.

[21] Там же, С. 5-6.

[22] *Земский А.* Против излишества в проектах // Строительство Москвы. 1953. № 7. С. 25.

ヴィチが指摘するように、建築家自身が決定したのではなく、「スターリン時代を通じて建築設計手法が党ソヴィエト組織によって審議され、決議されていた」[23]。つまり政府によって方針が打ち出され、建築家たちはそれに従うだけなのである。その方針が時代の要請に適合していなければ、それまでの建築規範となっている「文化遺産の習得」を墨守する彼らは「建築的フォルマリズム」という過ちを犯すことになるのであった。ここから過剰装飾というのは、「文化遺産の習得」と切り離すことのできないもので、その規範を定める党政府の代わりに、趣向を凝らしてその規範を実践している建築家たちが生贄となるための呪詛であったと言えるかもしれない。過剰装飾をめぐる建築家に対する批難は、すでに見てきたように、1955 年のフルシチョフによる「文化遺産の習得」に対する批難が公で登場するまで続けられることとなる。党政府レベルの最上位である指導者の直接的な言及によって初めて、それまでの建築規範にメスが入れられたのであった。確かに、第二次世界大戦後の第四次五カ年計画法案においても党政府レベルからの通達は出されていたが、それまでの建築規範を正面から批判するのではなく、やはりその規範を遵守する建築家たちの誤った実践手法が批難対象となっていたのである。

果たしてこの「建築的フォルマリズム」が、《ソヴィエト宮殿》のような当時登場した大型建築プロジェクトにおいてどのような形をとっていたのであろうか。この章で取り上げたソ連建築界での議論と同時期に登場した大型建築プロジェクトで首都モスクワに建造された高層建築群、その中でもモスクワ国立大学新館を具体例として次章では扱う。

3.「過去の建築遺産」の否定とその背景

「建築的フォルマリズム」は、戦後復興事業と従来の住居不足解消を目的とした大量生産型住宅建設を推進する中で生じた。この言葉によって「過去の遺産の習得」という建築イデオロギーに束縛された建築家自身が批難され、このイデオロギーを統制する党政府の方針に代わって建築家の活動が批難されるという図式が提示された。ではこうした図式は、問題の中心となっていた住宅建設以外、特に大型建築プロジェクトや建築競技設計に対する当時の批評にも当てはめることができるのであろうか。この点を二章では扱ってゆく。

第二次世界大戦後からフルシチョフによる、いわゆる「スターリン批判」がなされるまでの時期で実施された代表的な大型建築プロジェクトの一つとして、首都モスクワ中心部に計画された高層建築群を挙げることができよう。再びツァペンコの言葉を借りれば、モスクワの高層建築群の設計事業は「具体的な建築および建設活動において社会主義リアリズムのさらなる深化を示した［第二次世界：著者註］大戦後の建築活動における最大の出来事」であり、「同志スターリンのイニシアチヴと指示に応じて着手され」、「ソ連の建築および建設技術の開花に多大な貢献を果たすもの」であった。さらに、この高層建築群の建設が成し遂げられることで、「優れた建築家の手腕やあらゆる建築家が生み出す建築芸術の真の飛躍が求められているという揺るぎない事実」となると述べている[24]。この高層建築群は 1930 年代の大型建築物や建築プロジェクトで求められた性質を備えており、それ自体で完結することはなく、周囲の建築物に対して同じような建

[23] *Меерович М.Г.* «Посягательство на свободу, или Без вины виноватые» - принудительное изменение творческой направленности советской архитектуры в середине 1950-х годов // Архитектура и культура России в историческом взаимодействии под ред. Бондаренко. И.А. СПб., 2019. С. 98.

[24] *Цапенко* Социалистический реализм, С. 10.

築芸術としての質を備えた調和を求める。その結果として、「祖国の建築のより良い特徴を習得し、それを基にしたソ連建築の新たな伝統、つまりイデオロギー的かつ民族的に、楽観的な第一級のソ連建築作品のみがこの独特で美しい高層建築群とのアンサンブルを作り出すことができるのである」[25]。この論文は1949年に寄稿されたものであり、前章で取り上げた建築家の創造性を糾弾するアラビャンの論文よりも後のものではある。だが、この論文では「文化遺産の習得」にかかわる建築家を非難することなく、逆に建築家個人の創造性が建築イデオロギーと合致した最良の例として、この高層建築群が取り上げられているのだ。

また、1949年4月に発表された1948年度スターリン賞建築部門の第一等賞、第二等賞ほぼ全てがモスクワの高層建築群を構成する建築物となっている[26]ことを見逃してはなるまい。スターリン賞の創設は「同志ヨシフ・ヴィサリオーノヴィチ・スターリン生誕60周年に際して」[27]1939年12月20日付ソ連人民委員会議決議によって採択されたものであり、その授与対象として高層建築群がリストアップされた1949年はスターリン生誕70年だからである。ソ連芸術史家ジョンソン・オリバーが指摘するように、この賞は「文化および科学業績評価においてソ連政府によって授与される栄誉のなかで最高位のもの」であり、「ソ連芸術界でその世代のイデオロギー的なヘゲモニーを強化する上で、有効であった」[28]。ならば、スターリン賞授与作品は、「形式においては民族的に、内容においては社会主義的に」として曖昧模糊な社会主義リアリズムの方向性を導くための一種の装置であったと言える。ではどのような点がそうした方向性を導く役割を果たしたのか。ここでは、その当時建設が中断されていた《ソヴィエト宮殿》［フルシチョフ政権期に新たに組織される《ソヴィエト宮殿》ではない］と関わりのあるモスクワ国立大学新館に対象を絞って分析してみよう。

この建築物は当初ボリス・イオファンが設計を担当し、1947年にはその設計案が提出されている（図1）。中心部に配置された高層階の棟が両脇に配置され、それよりも低い棟が高層階の棟を挟むという形になっている。低層部には基壇となるスタイロベートがあり、低層部から高層部の壁面には目立った装飾はなく、付柱のような垂直状の分節がやや突き出て、それぞれの棟の隅上部は列柱によって労働者像と思しき彫刻が配置され、頂部には尖塔のようなモチーフが据えられている。こ

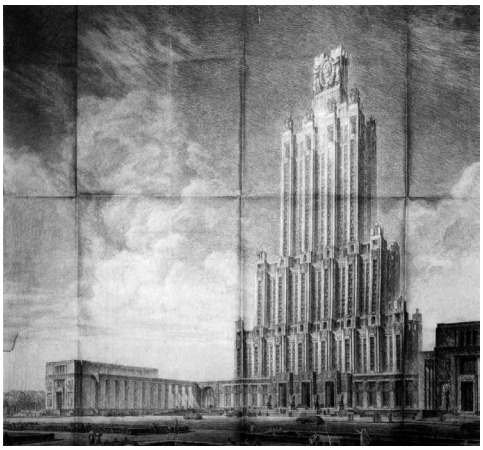

図1：イオファンによるモスクワ国立大学新館設計案、1947年

[25] Там же.

[26] Сталинские премии: две стороны и одной медали сборник документов и художественно-публицистических материалов. Новосибирск. М., 2007. С. 372-373. 第一等はモスクワ国立大学新館、ザリャーディエ河岸通りの32階建て官庁ビル（実現せず）、26階建てのホテル《ウクライナ》、20階建ての外務省ビルであり、第二等賞はホテル《レニングラード》、コテリニチェスカヤ河岸通りの17階建て住居ビル、蜂起広場［現クードリンスカヤ広場］の16階建て住居ビル、クラースヌィエ・ヴォロータ広場の16階建て住居ビルである。

[27] Сталинские премии справочник. М., 1945. С. 3.

[28] Johnson Oliver “The Stalin Prize and the Soviet Artist: Status Symbol or Stigma?,” *Slavic Review* 70, no. 4 (Winter, 2011), p. 819.

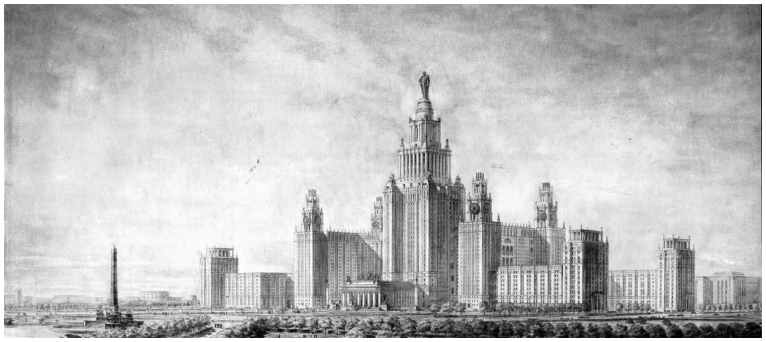

図２：ルードネフによるモスクワ国立大学新館設計案（原案）、1948 年

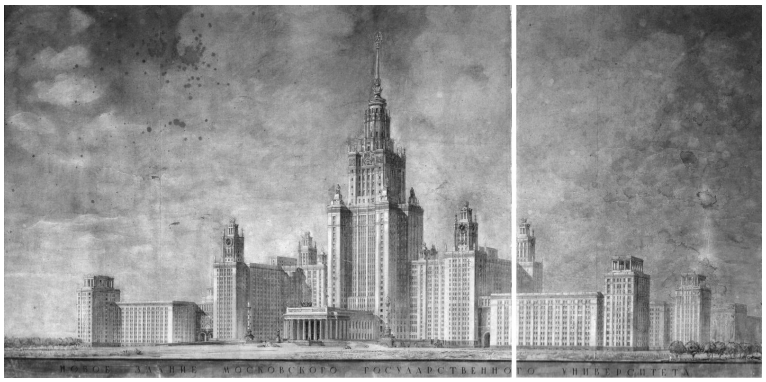

図３：ルードネフによるモスクワ国立大学新館設計案（最終案）、1948 年

うした要素によって高さへの志向が表現されており、この点は受賞対象となった他の高層建築物と変わるところはない。イオファンが設計したスターリン時代の《ソヴィエト宮殿》と相似する部分は、低層階が列柱廊によって形成されている点と、中央の棟の高層部や各棟建物頂部に人物像が据えられている点であろう。最終的にこの設計案は採用されず、代わりに設計がレフ・ルードネフに委託され、彼が設計した案が採用された。ルードネフによる設計案（図 2）は、イオファン案と同じく中心部に抜きん出た高さ 32 階の棟が配置され、その両側の棟が高さ 16 階と高さ 8 階の棟が配置され、中心部から離れるに従い段階的に低くなっているのが特徴である。中央の棟頂部は設計段階当初レーニン像が配置されていたが、最終的には小尖塔［ファイニアル］を伴う尖塔に置き換えられ、より垂直性が強調されている（図 3）。一方全体図で中心部の棟を挟む左右の棟は、東西を軸に中心から南北へ開く形、キリル文字の「Ж」の形を取っている（図 4）。モスクワ川に面した北東側の一階

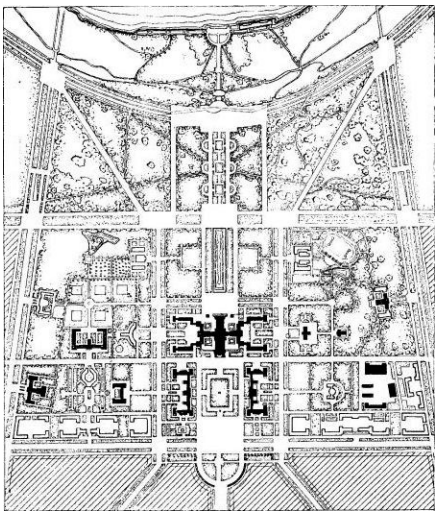

図４：モスクワ国立大学新館建設予定地全体図、1948 年。黒く塗られている部分が建物。

正面玄関入口は、外側へ突き出る形となっており、コリント式オーダーの列柱が配置され基壇［スタイロベート］を備えたポルチコが形成されている。両脇に広がる棟［高さ 8 階の棟］の隅頂部にも、この玄関部で見られる列柱によるバルコニーが配置される一方、中央の棟に近い部分の棟［高さ 16 階の棟］頂部四方には中央の棟頂部と同じく、小尖塔が配置された塔屋が配置され、段階的に高さが増すアプローチが取られている。建物全体のファサードは、イオファン設計による《ソヴィエト宮殿》やスターリン賞受賞対象となった他の高層建築物と同様に、連続する垂直および水平の部材による構造が取られ、棟高層部のレリーフや軒、塔屋、小尖塔、アーチ、正面入り口脇に配置された学生をモチーフにした彫刻などの装飾的要素が、北東側正面入り口から見て引き立っている。建物自体の高さが一層強調されるように、背面となる北側には、並木道へと続く広場が設置されている。北東側遠方から見ると、ちょうどモスクワ川の弧を描いた部分の頂点の上部先に並木道とその広場があり、その広場の幅の中心に建物の中央の棟が嵌るかたちとなっている。一方で建物背面に当たる南東側入り口前には通りを挟んで、南北の軸を基に左右対称に整えられた庭園が配置され、同じくその庭園の中央通路と大学新館の入り口中央が重なるかたちとなっている。東西の建物正面は中央の棟を挟む外側に開いた棟が外に広がり、南北と同じく広い玄関口が形成されている。また隣接区域の通路中心から伸びる形に玄関口が配置されているため、東西南北いずれにおいても左右対称性が強く打ち出されている。この左右対称性は建物のみにとどまらない。ルードネフが提出した全体図に再び目をやると、大学新館と南北に連なる広場と並木道のみならず、隣接する区域及び道路も建物の南北を軸に対称的な配置になるように整備されている。そのため北東遠方からのみならず周辺区域からも、建物が認識されやすい。こうした点をソ連建築史家ニコライ・クルジュコフは、当初の設計者のイオファンが考えていたようにルードネフもあらゆる場所から見てそれとわかるような特徴を考慮した結果であり、それはかつて《ソヴィエト宮殿》が都市再建後にモスクワの中でその建築的威容を示すという理念を果たしたとしている[29]。こうした点は、他の高層建築物の建設予定地が中心部であり、モスクワ国立大学新館のみが周囲の地区の再編と結びついて設計、建設されていることとも重なっている。《ソヴィエト宮殿》との相関性はこうした点のみに限られない。大学新館の当初の設計者イオファンは建物の設計を担当していた時期においても建設作業再開に向けて《ソヴィエト宮殿》の設計作業を担当しており、《ソヴィエト宮殿》の建設作業に関する実務を取り仕切っていたソヴィエト宮殿建設局（Управление Строительством Дворца Советов）が大学新館の建設作業に関する実務を任されていた。さらに大学新館の設計構造はフセヴォロド・ナソノフが担当し、彼はレーニン像を頂く《ソヴィエト宮殿》高層部荷重の解決方法及び鉄骨構造に関する学術論文を発表しており[30]、スターリン賞受賞対象の他の高層建築物の構造設計は担当していない。このことから、《ソヴィエト宮殿》と同じような高層部荷重構造あるいは鉄骨構造を大学新館に応用することが見込まれていた、つまり《ソヴィエト宮殿》と同程度の建物の規模がモスクワ国立大学新館には求められていたということがわかる。かつては「社会主義建設に向け、労働者の意志を体現する時代を性格づけるようなモニュメンタリティ溢れた建築物」[31] とされた《ソヴィエト宮殿》であっ

[29] *Кружков Н.* Высотные здания сталинской Москвы Факты из истории проектирования и строительства. М., 2011. С. 79.

[30] *Насонов В.Н.* Стальные каркасы Дворца Советов // Стальные каркасы многоэтажных зданий / Под ред. В.А. Балдина. М., 1939. С. 79-99.

[31] Дворец Советов. Бюллетень Управления строительством Дворца Советов при президиуме ЦИК СССР. М., 1931. № 2-3. С. 1.

たが、この大学新館が設計されていた時点では、建設再開の目処がたっておらず、プロジェクト自体がほぼ頓挫していた。大学新館の設計及び建設段階で、このように《ソヴィエト宮殿》の設計者、実務担当者、構造責任者を任命するということは、その建物と同じようなものを求めていたと言っても過言ではなかろう。外観や周辺区域との関連性から生み出される建物のイメージだけでなく、建設作業及び技術面においてもモスクワ国立大学新館は《ソヴィエト宮殿》を踏襲しようとしていたことがわかる。モスクワ国立大学新館が1948年度スターリン賞受賞対象となった他の高層建築物と異なる点は、こうした《ソヴィエト宮殿》との類似性にある。だとすれば、モスクワ国立大学新館は第二次世界大戦後の「ソ連芸術界でその世代のイデオロギー的なヘゲモニーを強化」するためのものだけではない。この建築物は、それ以前にソ連建築を牽引した建築物であるソヴィエト宮殿の代理表象でもあったのである。このように「同志スターリンのイニシアチヴと指示に応じて着手され」、最終的には彼の名を冠する賞に与ることとなった。一方で《ソヴィエト宮殿》の代理表象であるためか、スターリン死後の早い段階でこの建築物は「建築的フォルマリズム」の批難対象として扱われることはなかった。しかしその生贄となったのが、この建築物と同じ年度のスターリン賞に与った他の高層建築物の一つ、ホテル《レニングラード》である（図5）。

1954年の『ソ連の建築』誌11号においてルードネフによる論文「フォルマリズムおよび古典に関して」が掲載される。この論文は、プレハブ式鉄筋コンクリート生産の発展に関するソ連共産党中央委員会およびソ連閣僚会議決議を受けて建築家やエンジニアの創作的立場を見直すことを促すものである。ここで糾弾されるのは、当時のソ連建築界が推進していた規格化設計やそれに伴う大量生産型工法が未熟である点だ。その原因を「石造で低層階の建築手法を古典的な応用例で圧倒する鉄筋コンクリート造の高層階建築物に機械的に応用し」、「あらゆるやり方で無理やり細部を誇張し、極端なまでにオーダーを並べ立てること」、によって「ソ連建築における正当な発展の道を破壊し［…］フォルマリズム的傾向を生み出している」[32]としている。この「フォルマリズム的傾向」の主な理由としてルードネフは、過去の建築遺産の習得というスローガン［記事では「過去の文化遺産の習得というスローガン」］を簡略化し、創造的に受容せず、建築における伝統［装飾、工法、建築材料の特性を把握すること］を規格化設計やそれに伴う大量生産型工法へ応用していない点にあるとする。この論点は1章で確認した当時のソ連建築界での潮流に沿ったものである。ここで注意すべきは、彼は自らが設計したモスクワ国立大学新館と同種とも括れる高層建築物、ホテル《レニングラード》もその批難対象に含んでいる点だ。ただしその建物の外観ではなく内装を対象としている。この高層建築物は、1952年のツァペンコ論文において「独特で美しい高層建築群」の一つであり、モスクワ国立大学新館のように「ソ連建築界でイデオロギー的なヘゲモニーを強化」に寄与するものとされていた。しかし、その二年後のルードネフ論文で「美

図5：ホテル《レニングラード》設計案、レオニード・ポリャコフ、1949年

[32] *Руднев Л.* О формализме и классике // Архитектура СССР. 1954. № 11. С. 31.

しさが豊かさ、厳密には過剰さに取って替わられている」例として、「偽りのブルジョア的豪華さと勝手気儘な装飾という特徴」[33]がホテル《レニングラード》内装に見られるとする。そのほかにも当時建設された地下鉄駅内装に触れ、それらには「様々な建築様式の建築作品にある複雑な装飾形態が圧倒的になり始めている」[34]、つまり折衷的な様相を呈し、それぞれの建築物固有の特性とはそぐわないかたちで装飾が用いられている状況に対してルードネフは危惧を表明している。自らが設計したモスクワ国立大学新館で彼自身は、外観と内装において、確かに過去の建築様式からの要素を盛り込み「美しさ」を表現しようとしていた。だが、豪華さ（помпезность）や複雑な装飾形態（усложненные декоративные формы）を意識的に避けているのが、モスクワ国立大学新館建設時［1949 年］の彼の発言から理解できる。その発言を引用すると、大学の内装は「偉大なるソ連の学術と民衆とのその組織的な結びつきに関して同志スターリンが示唆した理念に基づいて」おり、「美しさと簡潔さを付与する明るい色調の石材、石灰岩、テラコッタで大学全体は仕上げられ」、「各施設の仕上げは木材で … 講堂や教室の色調は柔らかく落ち着いたものとなる」[35]。こうした点から、ルードネフはホテル「レニングラード」のような「偽りのブルジョア的豪華さと勝手気儘な装飾」を避けていたという免罪符を得ていた、あるいはそうした意識があったと考えられる。そのため、同じくスターリン賞受賞作品となった作品であっても建築家個人の咎による「建築的フォルマリズム」を指摘し、自らの設計においても戒めとしたのではなかろうか。しかし「過去の建築遺産の習得」という長きに渡りソ連建築界に膾炙した綱領は、もはや抗えない新たな潮流に呑み込まれていた。「大型パネルの建物は古典的な伝統を考慮して処理できるかもしれない」[36]として、主流になりつつあった大型パネルや大型ブロックによるプレハブ型工法に合わせて、「過去の建築遺産の習得」を応用させる旨を解いている。だが、その説明は明確さを欠いている。この歯切れの悪さはルードネフ自身の設計作品、すなわちモスクワ国立大学新館もこの時点のソ連建築界の潮流では批難対象となることを明示しているとも言えよう。

このルードネフの記事が掲載された一ヶ月後の 1954 年 12 月に当時の指導者層が出席した建設労働者全連邦会議が開催されている。その会合でフルシチョフは、仮借なき態度でソ連建築の現状に対して不満を述べる：

> 我々は美しさに異を唱えているわけではありません。ですが過剰装飾に対しては異を唱えます［…］尖塔のある建築物を建てることに熱を入れている建築家が何人かいます。その結果、そうした建築物は教会に似たようなものとなります。教会の姿がお好きなのですか？趣向に関する議論はしたくありませんが、住宅にこのような外観は不要でしょう。今日の住宅を建築デザインによって教会や博物館のようなものに変えてはならないのです[37]。

ゴルロフによれば、このフルシチョフの発言では「『芸術』としてのみ建築が一面的に理解されていることが批難され、建築材料の損失がいかにして『美的フォルマリズム』を生み出している

[33] Там же.
[34] Там же, С. 32.
[35] Московский университет. 1949. 11 фев.
[36] *Руднев* О формализме и классике. С. 32.
[37] Thomas P. Whitney ed., Khrushchev Speaks. Selected Speeches, Articles, and Press Conferences 1949-1961 (Ann Arbor: The university of Michigan Press, 1963), p. 169.

かという一連の例が示された」[38]。この点を敷衍すれば、ルードネフが指摘したような「豪華さや複雑な装飾形態」、つまり「過去の建築遺産習得」の応用に固執するあまり、建築物の外観が用途に応じたかたちとなっておらず、そのことが無駄な装飾や建築材料の浪費を生み出しているということになる。さらにこのフルシチョフの発言で「尖塔のある建築物を建てることに熱を入れている建築家」という部分に着目してみよう。この点は彼の発言で続けて登場する「教会のシルエット」をかたちづくる一例として挙げられているに過ぎない。だが、「尖塔のある建築物」とはフルシチョフの目からしてもわかりやすい、つまり目に留まりやすい「豪華さや複雑な装飾形態」を備える建築物を示しており、これに該当する当時建設された建築物はおそらくスターリン賞を受賞したモスクワの高層建築物であろう。

ルードネフの設計によるモスクワ国立大学新館は、述べてきたように、当初中央棟の頂部にレーニン像を据える形であったが最終的には尖塔を据え、その裾部にあたる棟の隅の頂部にも尖塔を配置し、その垂直性が強調された。またモスクワ国立大学新館以外にも、ソ連外務省ビル［現ロシア外務省ビル］（図 6）、コテリニチェスカヤ河岸通りの住居ビル（図 7）といった高層建築物も細部は異なれど、その垂直性を強調するかのように尖塔が随所で配置されている。こうしたことから、フルシチョフが批難する「尖塔のある建築物を建てることに熱を入れている建築家」とは、「同志スターリンのイニシアチヴと指示に応じて着手され」、「第一級のソ連建築作品のみが」肩を並べて「独特で美しい［…］アンサンブル」を形成する高層建築群を設計した建築家たちを指している。そのため、上記のフルシチョフ発言で批難対象となっているのは、建築を芸術という側面からのみ設計する建築家というよりも、むしろそれぞれの建築物本来の用途と無関係な装飾によってモスクワ、引いてはソ連全体の建築を象徴化するに至った建築物を生み出した建築家とそうした建

図 6：ソ連外務省ビル（現ロシア外務省ビル）、ヴラジーミル・ゲリフレイフとミハイル・ムンドヤンツ、1953 年

図 7：コテリニチェスカヤ河岸通りの住居ビル、ドミトリー・チェチュリンとアンドレイ・ロストコフスキー、1952 年

[38] *Горлов В.Н.* Хрущевская "оттепель" и отторжение сталинской архитектуры // Вестник МГОУ. Серия "История и политические науки". 2011. № 3. С. 153.

築物の建築においてイニシアチヴを発揮した指導者スターリンである。このことによって、フルシチョフは建築において規格化設計、大量生産型工法、過剰装飾排除に加えて、かつての指導者がイニシアチヴを発揮して設計および建設された建築物に対する否定的態度［以下「スターリン建築に対する拒絶」とする］も旗幟鮮明にしたと言えよう。

以上のことから、ソ連建築界で支配的であった「過去の建築遺産習得」という綱領は、第二次世界大戦後からスターリン死後わずかの期間まで未だ命脈を保つことができた。1章で論じてきたように、住宅建設を中心に規格化設計や大量型生産工法による設計および建設の合理化が推奨される状況で、この綱領は建築物の用途と異なるかたちでの過去の建築様式的要素の濫用や過剰な装飾から建築的フォルマリズムという誤ったかたちで建築家個人が生み出す問題を孕んでいた。さらにこのような点は、本章で見てきたように、モスクワ高層建築群をめぐる一連の評価で強化される。「ソ連の建築および建設技術の開花に多大な貢献を果たすもの」となったモスクワの高層建築群に適用され、それらの建築物が「ソ連政府によって授与される最高位」のスターリン賞の授与対象となったからである。だがその賞の名義人である指導者の死後、新たにその地位に就いたフルシチョフによってソ連建築界の潮目は変わる。それまで住宅建設を中心として他の建築物にも応用を望むような論調であった規格化設計、大量生産型工法、過剰装飾排除がスターリン賞を授与した建築物にも波及し、そうした建築物が立脚する「過去の建築遺産習得」という綱領自体が政府指導者によって否定的に受け取られるようになったのである。

4．ソ連建築におけるパラダイム・シフト

第二次世界大戦後のソ連建築界では、焦眉の問題の一つとして「過去の建築遺産習得」という綱領による否定的側面、つまり設計では装飾的要素、建設においては費用と時間の浪費が照射された。このことは、これまで論じてきたように、新たな指導者となったフルシチョフの登場によって突如として生じたものではない。だが彼の公での発言はこの綱領の効力を削ぐほどの影響力を持ち、のちに「設計および建設における過剰装飾の排除に関する」政府決議を導き、ソ連建築界の潮流を変えることとなった。本章ではこの点を一種のパラダイム・シフトと見なし、その背景にあるソ連建築界及びソ連文化全般に関わるイデオロギー的言説の生成過程に触れて、その中でこのパラダイム・シフトが何を生み出すに至ったのか論じていく。

まず注意しなければならないのは、ソ連建築界での潮流の変化がソ連建築界の根幹あるいは大枠である社会主義リアリズム自体を揺るがすものではないということである。これはすでに触れた通り、社会主義リアリズムが時機に応じてその内実を変容させるほどの漠たるものであったためと規定することもできる。一方で文化人類学者ユルチャクが論ずるように、フルシチョフが登場した時期にはそうした社会主義リアリズムという「外部の客観的な真理を知る唯一の存在」スターリン、すなわち「ソ連のイデオロギー言説を外から批判できる主人の立場が消滅」している[39]。このことを踏まえると、上記したソ連建築界の潮流を変える一種のパラダイム・シフトを生じさせた背景には、「客観的真理」であるところの社会主義リアリズムにソ連建築界のイデオロギー的言説が合致するかどうかの判断材料がなくなったということがある。そこで生じたのは、イデオロギー的言説が展開される場で優位にある言説がイデオロギーや何かしらの真理に照らし合わせて正しいかどうかという発話の意味そのものを問うことの喪失である。そのことに代わっ

[39] アレクセイ・ユルチャク（半谷四郎訳）『最後のソ連世代　ブレジネフからペレストロイカまで』（みすず書房、2017年）、15-17頁。

て、新たな意味を加える「パフォーマティヴ」な発話が生じ、儀礼的または形式的に受容される慣習が生じたとユルチャクは述べている[40]。このことを既に本稿で述べてきたソ連建築界の状況に照らし合わせて、見ていこう。

第二次世界大戦後のソ連建築界では「過去の建築遺産習得」、規格化設計、大量生産型工法といったテーマは上記したようにスターリンの治世下において議論されていた。だが、そうした状況下で「イデオロギー言説を外から批判できる主人」によって議論されたテーマの正当性がイデオロギーと合致するかといった判断は下されていなかった。むしろ様々な言説［「過去の建築遺産」においては模範的な建築物の紹介とそうでない建築物の紹介、規格化設計や大量生産型工法においては建設速度や費用の面に関するデータの提示と合理性の主張］によって、そのテーマの正当性が裏付けられていた。つまり、「言説に超越する特別な地位」によって「政治文書、文学・音楽作品、学術研究など」を槍玉にあげる「イデオロギー言語に関するスターリンのメタ言説」[41]［以下「スターリンのメタ言説」とする］が作用していない。この点を敷衍すれば、1930年代半ば以降のソ連建築界において、スターリン個人あるいはスターリンのメタ言説が介入した事例はほぼないと言ってよい。二章で挙げたモスクワの高層建築物は、確かに「同志スターリンのイニシアチヴと指示」で着手されたもので、この表現は彼個人の介入を示唆している。だが、ユルチャクが挙げる他分野での事例のようなスターリンのメタ言説とはなっていない。言い換えれば、スターリン個人、つまりソ連のイデオロギー言説を外から批判できる主人の名を借りてパフォーマティヴな発話がなされているのであり、スターリンのメタ言説と近いかたちが取られている。このことによってモスクワの高層建築物の設計および建設に正当性が付与されている。さらに国家最高の賞典となるスターリン賞というメタ言説を繰り出す個人［スターリン］の名義を借りた権威によって、モスクワの高層建築物は正当性がさらに高められていたと言えよう。また1930年代半ばに一大国家建築プロジェクトと謳われていた《ソヴィエト宮殿》を巡る言説においても彼の権威を借りた言説が用いられ、あたかもスターリンが重要な決定を下し、《ソヴィエト宮殿》建設作業に大きく寄与したメタ言説が用いられたかのようにされているが[42]、実際にスターリンのメタ言説は用いられていない。ユルチャクは、1950年にスターリン自身が「言語モデルの根本的改変に踏み切った」として、スターリンのメタ言語の位置に「客観的な科学的法則」あるいは「客観的な自然法則」が取って代わることとなり、メタ言説の立脚点が消失し、ソ連の言説体系は「根本的なパラダイム・シフトに舵を切った」としている[43]。このような背景を考慮すると、

---

[40] 同掲書、24-35頁。

[41] 同掲書、48-49頁。この例としてユルチャクは自著でマクシム・ゴーリキー監修の『内戦史』編集におけるスターリンの手直しと、イデオロギー的に「正しい」見解が当時のメディアで発表されていたこと、また政治関連文書や重要とも思われる芸術作品や学術研究に対する修正やその見解がのちに指針となって広まっていった事例をあげている（同掲書、49-51頁）。

[42] 例えば1939年の『ソ連の建築』誌ではソ連の建築家から見たスターリンの印象を綴った「忘れがたい出会い」と題する特集が組まれ、《ソヴィエト宮殿》の最終案設計を担当したヴラジーミル・ゲリフレイフは「ソヴィエト宮殿の設計に関する指導者の指示」と題する論文を執筆している。実際は主任建築家のボリス・イオファンを中心としたワーキンググループと建設作業や予算執行を取りまとめるソヴィエト宮殿建設局との話し合いで設計や建設作業の方針が固められ、最終的に政府首脳部がその採決を取るというやり方が取られていた。しかし、「同志スターリンは、ソヴィエト宮殿を建設するという考えが生じた時から、建設会議の全ての会合に参加し、彼が備える気取りのなさと機敏さを持ってして設計の際に生じたあらゆる問題を解決した」（*Гельфрейх В. Г.* Указания вождя по проектированию Дворца Советов // Архитектура СССР. 1939. Но. 12. С. 7.）と記されている。

[43] ユルチャク、51-55頁。

第二次世界大戦後からのソ連建築界での規格化設計や大量生産型工法に関する議論において、その正当性を担保するため建設費用の削減や装飾における浪費といった点を具体的な数値によって示すという経済的合理性が用いられたのも、そうした客観性重視の表れといえよう。

ここまでの点をまとめてみると、ユルチャクがソ連言説の変化として射程［スターリンのメタ言説が消失する分野］に入れている「農業、遺伝学、物理学、化学、文学、音楽、映画」[44] ではなく、その埒外の建築ではメタ言説を生み出す「主人」［スターリン］の権威によって様々なテーマがパフォーマティヴな言説として展開されていた。だが、戦後復興という状況から、それ以前から議論されていた規格化設計および大量生産型工法が喫緊の課題となるにつれ、それまでの権威による正当性の付与だけでなく、それとは異なるアプローチである経済的合理性によってもこの二つのパフォーマティヴィティが担保された。そのことが、建築分野外の言説で生じていたスターリンのメタ言語から客観性に立脚した判断基準への移行期と重なっていたため、ソ連建築界で展開されていた経済的合理性を駆使して展開されるテーマ［規格化設計、大量生産型工法］も自ずとこの流れに融合していったと言える。

このように、スターリン体制からフルシチョフ体制へとソ連社会全体が変容していった背景には、イデオロギー言説の場においてスターリンのメタ言説消失に伴って生じた客観性重視の姿勢が形成され、その移行期でもあったことがわかる。ユルチャクの説明に基づけば、こうした移行はフルシチョフによる公的な場でのスターリン批判［ソ連共産党第 20 回大会での秘密報告］で完成され、その後は「イデオロギー言説の枠外に立つ可能性がなくなる」[45]、つまりイデオロギー言説がイデオロギー［マルクス = レーニン主義］に照らし合わせて正しいかどうかの判断がなされなくなっていく。一方ソ連建築界では、そうした判断を行うスターリンのメタ言説は用いられていなかったものの、スターリン個人の権威を借りた言説に取って代わって経済性や合理性を重視した言説がパフォーマティヴなものとして定着していく過程にあった。そのため、軌を一にしていたソ連建築界の言説とそれ以外の分野でのイデオロギー的言説の性質が、スターリン批判によって重なり合うことになったと言えよう。

スターリン批判によってフルシチョフはスターリン個人のみならず、その権威を批判している。このことは、スターリンが担っていた役割を放棄しているとも言えるが、その役割の放棄が故に、イデオロギー的言説に対する真偽性を判断することに介入できない。なぜならば、スターリンはイデオロギーと権威的言説の真偽を判断する「外部の編集者」であり、「イデオロギーの言説の外にいて、マルクス = レーニン主義の真理規範を知る唯一絶対の存在」[46] であったからだ。この点をフルシチョフは 1956 年のいわゆる「スターリン批判」で攻撃している：

> 我々の歴史的な勝利は党の組織だった仕事のおかげで達成されたものであり、多くの地方の組織、そして我が国の偉大なる人民の自己犠牲的な労働のおかげで達成されたものです。こうした勝利は、総じて人民と党の活力と行動の結果なのです。つまり、個人崇拝の時代に定着していたようなスターリンの指導による賜物では全くないのです。もし我々がマルクス主義者やレーニン主義者としてこうした事例を考えるのならば、スターリンの晩年に確立された指導体制は、単刀直入に言って、ソ連社会の発展の途上において深刻な障害となるでしょ

[44] 同掲書、原註 38 頁。
[45] 同掲書、55 頁。
[46] 同上。

う[47]。

その役割を個人ではなく共産党といった集団が担うようになり、フルシチョフ個人はその代表者という立ち位置を貫く、つまり彼個人でなくとも替えが利くようになる体制へと変化した。そのため、ユルチャクが指摘するように、どのような形でイデオロギー的言説［党の公式見解、公式文書］が誰の発案でどのように解釈すべきかという編集や議論のプロセスは開示されなくなる。一方でそうした編集や議論を経た結果としてのイデオロギー的言説のみが、党や公的機関の代表者［ユルチャクの表現を借りれば「中継者」］によって公開されるため、その代表者はスターリンのようにある規範に照らし合わせた正しい言説を生み出す人物ではない。イデオロギー的言説の編集や議論は党や公的機関または専門家委員会といった組織集団が担う一方で、「マルクス＝レーニン主義の真理規範を知る唯一絶対の存在」が消失しているため、「上層部のかつての発言や文章をそっくり正確に」[48] なぞり、真理規範から逸脱しないかたちが取られるようになる。このような言説をめぐる状況が変化し、新たなかたちが熟成されるのは、ユルチャクの指摘に従えば、1960-1970 年代と「スターリン批判」よりも後の時期である[49]。ここでは、新たなかたちが熟成される前のいわば過渡期において、イデオロギー的言説の「中継者」であるフルシチョフがその立場を建築分野で確立していく過程に着目する。そのような立場からフルシチョフによって用いられた言説が、先の章で触れてきたスターリン建築に対する拒絶とどのようなかたちで結びついているのかを見ていくことにしよう。この事例として、ここでは序論でも触れた 1954 年の建設労働者全連邦会議での発言、1958 年モスクワで開催された世界建築家連合第 5 回国際会議［以下「第 5 回 UIA 国際会議」とする］での発言を対象とする。

1954 年の建設労働者全連邦会議でフルシチョフは 1. 建設産業における喫緊の問題、2. デザインにおける欠陥の排除と建築家の設計作品改善、3. 建設労働者の最重要課題である規格化拡大、4. 建設における設計と経済の特定の問題について、5. 労働生産力向上と熟練建設労働者幹部の供給、6. 道路建設および地方の建設現場での観察、といった 6 つの題目に関して発言を行なっている。すでに本稿で指摘した、住宅に教会のようなシルエットが用いられている現状に対する糾弾は 2 の題目の中で発言され、この題目がスターリン建築の拒否へと繋がっていく。しかしここで注意すべきは、明確なかたちで指導者スターリンは批難されず、現状として数多くの建築に関わる「過ち」が指摘され、そのことを改める提案が指導者の立場から挙げられていることである。そうした指導者からの提案は、1 章で述べてきた通り、大量生産型住宅や建築における規格化設計の推進に拍車をかけることになるが、その根拠となっているのが「経済的効果」である。

題目 1 における建設作業改善と産業化に関する発言でフルシチョフは、「鉄筋コンクリートの構造および建設部材製造の開発」に関する同年 8 月 19 日付ソ連閣僚会議決議を基に鉄筋コンクリート製造工場での生産拡大を唱えている。このことは、「費用と建築材料を節約し、生産高を向上させ、結果として建設労働者の賃金を上げる」[50] とされ、政治イデオロギー的な判断ではなく、経済的合理性による判断に依拠していることがうかがえる。

---

[47] *Хрущев Н.С.* Доклад на закрытом заседании 20 съезда КПСС "О культе личности и его последствиях". М., 1959. С. 55.

[48] ユルチャク、56 頁。

[49] 同掲書、55-61 頁。

[50] Thomas P. Whitney ed., *Khrushchev Speaks. Selected Speeches, Articles, and Press Conferences 1949-1961* (Ann Arbor: The university of Michigan Press, 1963), p. 158.

建築物の外観に触れた2の題目に関して、すでに指摘したように過剰な装飾と建築物の用途にそぐわない外観がそれまでの建築物で見られることを糾弾しているが、やはりその根拠を辿ると経済的合理性に行き着く。この例として、規格化設計の利点に関する発話に求めることができよう。フルシチョフは、規格化設計が普及することによって「建築部材や設計書がすでに存在し、建設場所の敷地がどのくらいの大きさなのか、どの部材や材料が必要となるか、どのくらいの人数の建設労働者が必要となるかということがわかる」として、そのことが「建設作業を加速化させ、費用を相当減額することに役立つ」とし、「建設作業での浪費を避け、建設速度を上げ、建設作業の改善を図ることに大きな効果がある」と述べている[51]。また「浪費は建設作業でしばしば目にすることとなり、それは主に、個人の意匠に沿って建物を建てる建築において過剰装飾を取り入れる建築家の誤りである」[52]として、個々の建築家による設計では浪費が起こりやすい点を指摘し、そうしたことが建設産業化の「躓きの石」となっているとする。さらに、そうした個人による設計の弊害以外にも、「反審美的で現代ブルジョア建築の退屈な『箱型』という特徴を持ち」、「党の方針や規定の中で激しく批難される」構成主義建築に意を唱えるかたちで、意匠における無駄が設計原理として正当化されていることを挙げる。この点は結局のところ、それに異を唱える建築家自身も装飾に固執するため「ファサードのための建物」となって「内容から分離した形態を誤ったかたちで美的に崇拝」し、そのような建築家たちは「大衆の資金を浪費しながら、構成主義建築との闘いや社会主義リアリズムという表現の背後に隠れて」しまっているとしている[53]。つまり、それまで建築家たちがソ連芸術全般で政府方針に従って是とされていたイデオロギーである社会主義リアリズムを盾に、建設費用を浪費するといった行動をフルシチョフは戒めている。翻ってこの点は、先に述べたスターリンのメタ言説のようにイデオロギーの真偽を判定することではなく、新たな価値観である経済的合理性を判断材料として設計行為を批評したパラダイム・シフトである。このようにして、それまでのイデオロギー的評価によって正当性を与えられていた建築、すなわちスターリン時代の建築を退けることの表れが明確なかたちでフルシチョフから発言されたのである。

こうした点を補足するのが4の題目である。ここでフルシチョフはソ連各地で行われている建設事業を紹介し、それらの事業に対して適切な予算配分や人員割り当てが行われず、さらに建設設備や資材供給が滞っているため、完成が遅れているという現地からの報告を取り上げる。こうした問題が生じる原因を、あらかじめ建設事業を取り仕切る組織［ゴスプラン、国家建設委員会、国家計画委員会、財務省］が決定した建設作業全体の予算及び人員配分が設計及び建設段階で遵守されないばかりか、そうした機関自体も建設費用の倹約に関して適切な形で考慮していないとしている。この解決方法として、各々の建設労働者が建設作業全般の経費を気にかけ、建設関連組織から独立した形で国家予算全体を取り仕切る国立銀行の権限を強化することにより、建設費用の浪費と建設作業の合理化を推し進める必要があると説いている[54]。

---

[51] Ibid. p. 166, p. 167.

[52] Ibid. p. 167.

[53] Ibid. p. 171-172.

[54] Ibid. pp. 182-183. この点に関してフルシチョフは、建設作業を引き受ける下請け活動や建設作業に従事する組織に関する規則や規定が「1936年のものと1938年のもののままである」と述べ、「こうしたことすべてが建設業務の発展に悪影響を及ぼしてきた」としている（Ibid. p. 183）。「1936年のもの」とは1936年2月11日付全連邦共産党中央委員会及び人民委員会議「建設業務改善と建設費用切り下げに関する」決議で、「1938年のもの」とは1938年2月26日付人民委員会議「設計及び予算事務改善と建設財務整備に関する」決議を指す。この二つの決議では、設計や建設作業に伴う予算の浪費防止に関

こうしたことから1954年の建設労働者全連邦会議でのフルシチョフの発言は、経済的効果を主軸にした過剰装飾の排除のみならず、建設費用の浪費を防ぎ、倹約を徹底することによる建設費用合理化も盛り込まれていた。このような発言は、すでに述べてきた通り、スターリンのメタ言語とは異なり、「唯一絶対の存在」による何らかのイデオロギー判断を伴うものではない。建築・建設分野において生じていた問題と解決方法をフルシチョフが、各方面からの報告をもとに「中継者」として述べているに過ぎないのである。しかし、建築分野において権力者が公の場で方向性または指針を決定付ける発言を行うということは、それまでにない事態であった[55]。こうした事態は建築潮流の変化のみならず、スターリン時代における他分野で見られた権力の介入を結果として生み出した。当時建築アカデミーの大学院生であった建築史家ハン＝マゴメドフは「建築におけるフォルム形成の芸術的問題への権力の介入が［建築家：著者註］全員に当惑と不快感を呼び覚ました」[56]と、このフルシチョフ発言を回顧している。このマゴメドフが感じた「当惑」とは、スターリン時代にイデオロギー的誤りのため身に覚えのない「人民の敵」として名指しで批難対象となった状況［つまり「スターリンのメタ言語」によるイデオロギー判断］で作家や芸術家達に去来し、自らが排除されるという恐怖に近い感情ではない。むしろ、それまでには起こり得なかった未知の状況に呆然となったのであろう。それは、自らの創作活動がイデオロギーに則して生じた新たな建築潮流の中でどのように位置付けるかということではない。経済的合理性を判断材料とし、さらには「中継者」である権力者があたかも「唯一絶対の存在」のようにその判断を下すという新しい状況が生み出されたことを、マゴメドフの「当惑」は物語っている。

この状況に説得性を持たせるのが、1958年にモスクワで開催された第5回UIA[57]国際会議最終日におけるフルシチョフとUIA幹部との会談の席での発言である（図8）[58]。この第5回会議では「建設と再建 1945-1957」というテーマで、建築家たちが自らの国の代表的都市の都市計画の現状

して、指揮系統の明確化や予算の遵守が定められてはいる。しかし更なる合理化を推し進め、予算（建設費用）遵守を徹底するために改めて建設費用に関する枠組みの整備を作成する必要性から、かつての決議案改善の余地を強調したと考えられる。またこのことは、その善し悪しにかかわらず、スターリン時代に整備された枠組みを払拭するという方向性からも生じた発言として考えることができよう。

[55] スターリン統治時代における建築・建設分野でのいわゆる「権力者による容喙」の例として、本稿でも触れられている1930年代における《ソヴィエト宮殿》（競技設計段階）と第二次世界大戦後のモスクワにおける高層建築群を挙げることは可能である。しかし、前者においては非公式かつ「個人の発案」というかたちであり、競技設計の最終決定に対して決定的な影響を及ぼしたとは言い難い（詳細は鈴木佑也『ソヴィエト宮殿　建設計画の誕生から頓挫まで』水声社、2021年、233-235頁を参照）。また後者に関しても飽くまでも「イニシアティヴを発揮」したと建築雑誌や新聞といったメディアなどで伝えられるのみで、スターリン自身が公の場で高層建築群建設の意義を語り、建築関連の会合や会談に出席し発言を行ったという記録は存在しない。

[56] *Хан-Магомедов С.О.* Хрущевский утилитаризм: плюсы и минусы http://www.niitiag.ru/pub/pub_cat/han_magomedov_hrushhevskij_utilitarizm_pljusy_i_minusy（2021年12月30日閲覧）

[57] UIA（International Union of Architects：世界建築家連合）とは1948年に設立された国際連合教育科学文化機関（UNESCO）付属機関の国際的な建築家団体で、国際親善および交流ネットワーク形成を目的とし、現在もなお活動を続けている団体である。

[58] この国際的な建築家団体の執行部幹部（ロバート・ホッグス・マシュー（イギリス）、ヘンリー・スターン・チャーチル（アメリカ）、ヨハネス・ヘンドリック・ファン・デン・ブレーク（オランダ）、ピエール・ヴァゴ（フランス）、ヘクター・マルドネス・レスタット（チリ）、パーヴェル・アブローシモフ（ソ連））と開催国関係者（ヴラジーミル・クチェレンコ（ソ連閣僚会議管轄建設国家委員会代表：当時）、イヴァン・グリシュマノフ（ソ連共産党中央委員会建設局長：当時））とフルシチョフが同席する運びとなったのは、UIA設立に携わり1930年代からソ連建築界と交流を持っていたハンガリー人でフランスの建築家であるヴァゴによるところが大きい。詳細はPierre Vago, *L'UIA, 1948-1998* (Paris: Editions de l'Epure, 1998) を参照。

から意見交換を行い、共通の課題を討議するというものであった。そうした点を踏まえ、フルシチョフはこの時点で既に軌道に乗り始めていたプレハブ式工法による住宅建設に関してUIA幹部に対し宣伝を行い、この会議で企画されたセクションテーマの一つである「建設における技術上の問題と産業化」に対するソ連政府の積極性をアピールしている。

図８：第８回UIAモスクワ会議前のUIA幹部とフルシチョフによる会合の写真

だが、そうした内容に触れるのは会談の締めくくりにおいてであり、フルシチョフは古代ギリシアおよび古代ローマ建築に対する見識について触れることで、UIA幹部との議論を始めようとする。この点はソ連建築界にとって重要な点であった。何故ならば、既に触れてきた「古典建築遺産の習得」の源泉、つまり古代ギリシア及び古代ローマ建築の様式をも包含した歴史的建築様式を何故ソ連建築が重要視するのかというスターリン時代のソ連建築そのもののアイデンティティに関わるからである。1931年の《ソヴィエト宮殿》公開競技設計審議段階では、上記の二つの建築様式に関して「社会生活において自由に生活した市民が広汎に存在していた」時代の建築であり、その市民生活を反映したものであるから「西欧現代建築の偉大な建築物にしばし見られる」ように「ソヴィエトのモニュメンタル建築は古典建築にその礎を築く」方向性を差し示すものと評されていた[59]。この競技設計審議で示された指針が、のちの「古典建築遺産の習得」というソ連建築界の方向性に影響を与えたのは周知の通りである。だが、フルシチョフはこの時代の建築に対して、異なる観点から評価を下している。彼は「誰もこの時代の建築は、実際優れたものであったと否定はしません」とした上で、「奴隷所有者という支配層のための装飾で、その建築物を創り出した人々のためのものではないのです」として、「建築家たちは民衆のためではなく、支配層のために建築活動を行っていたのです」と述べている[60]。つまり、スターリン時代では古代ギリシアと古代ローマの建築物自体がその時代の社会や雰囲気を反映したものという結果として解釈された上でソ連建築の模範対象とされていた。だが、このフルシチョフの発言ではその建築物が誰のためか、またはどのような目的のためかという用途に焦点が当てられているのだ。こうした目的や用途よりも建築物そのものを模倣することへの傾倒がしばしば生じた原因は、「ソ連では建築家は建設従事者ではなく、おそらく芸術家であるという方針が支配的でしたから」[61]とフルシチョフは説明する。そのため彼らを指導する機関「建築アカデミー（Академия архитектуры）を建設及び建築アカデミー（Академия строительства и архитектуры）という名称にしてやったのです」[62]。この点はソ連建築史家オリガ・ヤクシェンコが指摘するように、「建築家の地位の変化は『建築』とい

[59] Государственный Архив Российской Федерации (ГАРФ), ф. 3316, оп. 64, ед. хр. 563, л. 71-72.
[60] "Самая благородная и интересная работа - это архитекторов, строителей" Стенограмма беседы тов. Н.С. Хрущева с руководителями Международного Союза Архитекторов - участниками 5 Конгресса МСА 25 июля 1958 г. // Источник. 2003. № 6. С. 91.
[61] Там же.
[62] Там же.

う言葉に『建設』という言葉が付け加えられた雑誌や研究所の名称に象徴的に現れ」、「建設が建築を追いやり、建築はその優位性を失った」[63] 証左である。またフルシチョフ自身も「芸術美学的側面といったものは副次的で、最優先にしなければならないのは建設的な部分なのです」[64] と述べる。建築家指導機関の名称では「建設（строительство）」と「建築（архитектура）」が併記されるものの、ものを建てるという営みの中で培われる技術や手法、様式の総称としての「建築」ではなく、土木作業による構造物や建築物を建てることに力点を置く「建設」が今後のソ連建築において重要であるということを示唆している。そのため、工学的側面を建築家に認識させるというよりも、むしろ建てるという行為自体に従事することへの関わりを意識させているのが読み取れよう。

さらにソ連建築家に対する意識変革を求める発言をフルシチョフは続ける。アメリカやイギリスのような資本主義国家において経済的投機による競争（конкуренция）をソ連の建築家は学ぶべきとしながらも、そうした経済的投機を除いた競争（соревнования）を「都市計画や住宅建設におけるより合理的な手法を見出すため社会主義的環境の中で求めているのです」[65] とフルシチョフは述べる。こうした競合的環境で建築家が建築活動に従事させることで「完全に鉛筆で勘定をすることをやめてしまい、絵筆でしか作業を行わない我が国の建築家たちを急き立たせるのです」[66] としている。ここではソ連の建築家が審美性に注力して設計を行い［「絵筆でしか作業を行わない」］、経済的合理性を勘案していなかった［「鉛筆で勘定をすることをやめてしまった」］かつての習慣を戒めるとともに、そうした習慣を改善せるため彼らの活動環境への容喙が認められる。

こうした建築活動に関する容喙はフルシチョフ自身が「建築活動に取り組んでいる」[67] と宣言するように、イデオロギーの判断を下す絶対的存在ではなく政府首脳部の「中継者」であるにもかかわらず、権力者として自らが建築界を仕切る振る舞いともいえよう。この振る舞いは、フルシチョフ自身が「我々と建築家の関係を正しく理解するために」UIA 幹部に述べた次のような建築家に対する見方に表れている：

> 彼らは建築家として、提示された課題をこなし、モニュメンタルな建物をとても優れたかたちで創り上げました。しかし私は彼らをこうした浅はかさ（неразумность）から解放しました、というのも彼らはそうしたことで罪はないからです。彼らにはそうした課題が与えられ、そうしたことから解き放たれたのですが、彼らに対する私の批難は行き届かなかったのです[68]。

この「モニュメンタルな建物」とは、この国際会議の会場となったモスクワ国立大学新館を指している。設計を担当した建築家自体を批難するのではなく、そうした建築物の依頼を行った依頼主の意向［「浅はかさ」］を咎めることにより、かつての政府指導部と建築において異なった方針

[63] *Якушенко О.* Советская архитектура и Запад: Открытие и ассимиляция западного опыта в советской архитектуре конца 1950-х – 1960-х годов // Laboratorium. М., 2016 № 8(2). С. 81.
[64] "Самая благородная и интересная работа", С. 91.
[65] Там же, С. 92.
[66] Там же.
[67] Там же.
[68] Там же, С. 94.

を取り入れているということを強調しているのである。しかし、この点には注意が必要である。なぜならばこの「浅はかさ」つまり依頼主の意向とは「古典建築遺産の習得」によって生み出された過剰装飾であり、これは政府方針を解釈したソ連建築界で形成された潮流であるからだ。そのため、フルシチョフはここであたかも権力者によってそうした潮流が形成されるという論理を展開しているのである。それと同時にかつての政府方針［つまりスターリン時代の方針］であって、自らが率いる政府の方針ではないことを暗に示している。

さらに「批難は行き届かなかった」という点は、この会議が行われた時点でもなお過剰装飾を取り入れた設計が行われていることを意味し、この発言の直前に UIA 幹部のピエール・ヴァゴがモスクワでは「新たな建築的フォルムが見出せない」という指摘を受け、そのことに対する弁明とも言える。一方で権力者が新たな建築潮流を導いているにもかかわらず、その力が十全に及ばないことを示唆している。この点は、会談の終わりに差し掛かって話題となった新たに企画された《ソヴィエト宮殿》の建設予定地に関する意見にも現れている。

この会談前には、モスクワ国立大学新館の南側が《ソヴィエト宮殿》の建設予定地と決定していた。しかし、「モスクワ国立大学の背後になり」、「都市［モスクワ：著者註］の主要建築物という理念を表現することは決してないでしょう」[69] とヴァゴは建設予定地が適切ではないと批難している。そうしたことを回避するために様々な方策があるというヴァゴの提言に対して、フルシチョフは「既に厳密なかたちで決定されており … いずれにせよ選択肢は限られているのです」[70] として自らの管轄外であり、権力が及ばないことを暗に仄めかしている。

この UIA 幹部との会談において、それまでソ連建築界で支配的であった審美性に重点が置かれていた潮流を払拭し、経済的合理性に基づいた建設活動といった新たな潮流を建築分野で整備し、それを仕切る政府指導者としてフルシチョフは振る舞っている。「政務の時間を割いてまでも」国外建築家たちと会談し、UIA 幹部のロバート・マシューが評したお世辞とも取れる「優れた建築家」[71] として建築に対する理解があるかのような印象を与えるのに成功したと言えよう。一方でイデオロギー的判断はどうであれ、決定済みの事項に対しては「中継者」としての立場を貫く政府指導者としての一面も現れており、「絶対的な存在」による最終判断を下す立場ではなく、結果が導かれる前段階の過程［ここでは建築活動］に対して口を挟むというソ連建築界にマゴメドフが抱いた「当惑」をもたらす存在としての姿が、この会談の振る舞いに投影されたのであった。

5．結論

フルシチョフ政権期に計画される建築プロジェクト《ソヴィエト宮殿》が公表されるまでのソ連建築界の潮流は、単に「過去の建築遺産の習得」による装飾性が批難され、新たな建築スタイルの模索がなされていただけではなかった。本稿で述べてきたように、政府指導者であるフルシチョフの建築関連における振る舞いが、それまでの指導者と異なったものとして形成されていく過渡期でもあった。ユルチャクが論じたように、フルシチョフはイデオロギーの正当性を判断する絶対無二の存在としてではなく、様々な組織や機関の決定事項を伝達し、それらに関連する言説を公に定着させる「中継者」であった。スターリンのように判断対象となる作品に対して、ソ連という国家の根幹に関わるイデオロギーの真正性を問うことをフルシチョフは行わなかった。

[69] Там же, С. 95.
[70] Там же.
[71] Там же, С. 92.

彼自身は「中継者」という立場からそのような判断に依拠しない経済的合理性という基準を適用し、この基準を顧みなかったかつての建築潮流を糾弾した。このことは、フルシチョフ自らの権威の源泉となるいわゆる「スターリン批判」と関連し、それまでの指導者スターリンとの差異を強調したことが逆にソ連建築界への積極的な介入へと繋がり、建築関連会議での彼の言説はそれまでソ連建築界が依拠していた権力者の権威性［スターリンの権威性］を否定することで、自身の権威性を高めることとなった。

このような過程において、「過去の建築遺産の習得」の行き過ぎた結果としての「建築における装飾性」に対する批難は、確かにソ連建築界で第二次世界大戦前後から議論されてきた問題ではあった。1章で論じてきたように、そのような趣向を伴う設計をおこなった建築家に対して投げかけられた「建築的フォルマリズム」として定着していた。だが、ソ連における文芸分野全般で適用されていた社会主義リアリズムが政府方針を基にしているという原則から生じていたため、建築界における方針そのものを批難できないという事情が絡んでいた。そのため、フルシチョフによるかつての権威の否定と新たな価値観である経済的合理性の受容によって建築活動を行うことが公の場で発言されたことにより、つまり権力者によるパフォーマティヴな言説が取られたことにより、個々の建築家に向けられていた非難の矛先を収め、ソ連建築界全体の方針を切り替えることが可能になったのである。

「建築における装飾性」と「設計及び建設における過剰装飾」とは、フルシチョフによってパフォーマティヴな言説の中で扱われ、スターリン時代と異なり権力者の意向が建築分野に直接介入することを生み出す契機となった。一方で、イデオロギー的な判断を伴わないためかつての権威［つまりスターリンのようなイデオロギーシステムの外から真正性を判断できる存在］よりその強制力は弱いにもかかわらず、権力者の権威を保つための言説であったと言えるであろう。こうした状況が、新たに組織される《ソヴィエト宮殿》の前段階で形成されたのであった。